Risk of colorectal neoplasm in patients with acromegaly and its relationship with serum growth hormone levels

著者	Matano Yutaka
著者別名	又野, 豊
journal or publication title	博士学位論文要旨 論文内容の要旨および論文審査結果の要旨 / 金沢大学大学院医学研究科
volume	平成18年7月
page range	70-70
year	2006-07-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/14746

学位授与番号	乙第 1612 号
学位授与年月日	平成 17 年 11 月 2 日
氏 名	又野 豊
学位論文題目	Risk of colorectal neoplasm in patients with acromegaly and its relationship with serum growth hormone levels (末端肥大症患者における大腸新生物の危険度とその血清成長ホルモン値との関係)
論文審査委員	主 査 教 授 金子 周一 副 査 教 授 中尾 眞二 橋本 琢磨

内容の要旨及び審査の結果の要旨

末端肥大症患者では大腸癌及び大腸腺腫の有病率が高いとの報告があるがその危険度に関しては未だ一定した見解は得られていない。疾患の頻度が極めて低く、適切にデザインされた患者対照研究が未だなされていないためと思われる。今回新規末端肥大症患者のみを用いて、年齢、性、喫煙の有無をマッチングさせた患者対照研究を行い、大腸における癌、腺腫、過形成性ポリープの危険度を検討し、さらにそれら大腸病変の有無と血中成長ホルモン(以下 GH)値との関係を検討した。

1990 年より 2000 年までの間に末端肥大症として当科に入院した 32 例のうち新規症例 19 例を対象とした。全例において治療前に全大腸内視鏡検査を施行し、認められた病変について病理学的検索を施行した。同期間に当科にて全大腸内視鏡検査を受けた非末端肥大症患者 1065 例中、除外規定に該当しない 891 例から、性、年齢、喫煙の有無をマッチングさせた症例を無作為に抽出し、得られた 76 例を対照群とした。末端肥大症患者における各大腸病変の危険度の検討、および上記大腸病変の有無と血清 GH 値との関連の検討を目的として統計学的解析を施行した。

得られた結果は以下のように要約される。

1. 末端肥大症患者群では 7 例(36.8%)に過形成性ポリープ、8 例(42.1%)に腺腫、3 例(15.8%)に癌を認めた。オッズ比はそれぞれ 8.3(95%信頼区間 2.1-32.7)、4.2(同 1.3-13.7)、9.8(同 1.0-97.2)でいずれの病変においても危険度が有意に高かった($p < 0.002$, $p < 0.02$, $p < 0.05$)。今回の研究で、交絡因子を考慮した上での、末端肥大症患者の大腸における各病変のおおよその危険度を明示した。

2. 大腸病変の有無と血清 GH 値との関連について、単変量解析では過形成性ポリープを有する患者で血清 GH 値が有意に高く($p < 0.05$)、線形重回帰モデルでは、過形成性ポリープ、癌を有する患者でそれぞれ血清 GH 値が有意に高かった($p < 0.01$, $p < 0.006$)。これらの結果は末端肥大症患者における大腸病変と血清 GH 値との間の何らかの関係を示唆した。

今後、より大きな規模の研究による追試が必要と思われるが、今回の結果は、末端肥大症での大腸病変の病態生理やスクリーニングに関して有益な情報を与えるものと思われ、学位に値する内容であると判断した。